

特集：高品質・安定多収および環境調和をめざした飼料作物病害虫の研究動向

飼料イネにおけるイチモンジセセリ (イネツトムシ) の発生と防除

茨城県農業総合センター農業研究所 にし みや さと み
西 宮 智 美

はじめに

稲発酵粗飼料用イネ（以下、飼料イネと略記）栽培は、BSE 問題の発生や輸入農作物の農薬汚染事故を契機に高まった食の安全を求める声と、輸入飼料高騰のあおりを受け、自給飼料生産拡大の切り札として期待されている。

茨城県においては、県北の水戸市、大洗町および県南の稲敷市が主な飼料イネ栽培地域であるほか、近年は県西地域にも導入され他種畑作物や野菜との輪作体系に組み込まれている。また、食用水稻品種に替えて莖葉部収量が高い飼料イネ専用品種の利用が進んでおり、‘クサホナミ’と‘はまさり’がおよそ8割、その他早生品種として‘夢あおば’、晩生品種として‘リーフスター’等が栽培されている。いずれの地域でも、飼料イネの作付けは食用イネの移植作業や麦作の収穫作業後に続いて行われることから、移植時期が遅く、莖葉部収量を確保するため施肥窒素量が多い。したがって、病害虫の発生状況が食用イネ栽培と異なる面がある。

「イネ発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル」（イネ発酵粗飼料給与技術検討会，2009）によれば、飼料イネ栽培においては、全国的にイネツトムシや稲こうじ病の被害が目立ち、西南暖地ではイネミズゾウムシやウンカ類など飛来性害虫の発生リスクが高いとしている。本県ではイネミズゾウムシやイネクビホソハムシ（イネドロオイムシ）の被害が少ない一方、イネツトムシやコブノメイガの発生が多い。これらの中で、イネツトムシによる被害は各地で常発的に認められ、上位葉のおびただしい食害により莖葉部収量が大幅に低下することから、飼料イネ生産現場では最も警戒されている。

そこで、本稿では主として茨城県内の飼料イネ栽培現地、並びに茨城県農業総合センター農業研究所内での調査結果を基に、飼料イネ圃場におけるイネツトムシの発生実態と防除対策について述べる。

なお、本研究は地域農業確立研究「関東地域における

飼料イネの資源循環型生産・利用システムの確立」
(2004～08年)の中で実施したものである。

I 茨城県におけるイネツトムシの発生状況

イネ葉上でふ化したイネツトムシ幼虫は、初め葉身先端部を巻いて長さ1 cmほどの巣を作るが、成長に伴って数枚の葉をつづり合わせた苞（以降、ツトと表記）を形成し、終齢幼虫が作ったツト内で蛹化する（図-1）。若齢幼虫の体色は淡緑色で頭部が黒色であるが、中齢期以降は頭部に特徴的な斑紋を生じ、終齢幼虫の体長は30 mmを超える。このころになるとツトも大きく、摂食量も増加するため一見して被害発生を確認できるが、初期の被害を見いだすには注意深く観察する必要がある。

本種は幼虫で越冬し、茨城県下では越冬世代成虫が6月上旬ごろから水田に飛来し、第1世代幼虫が発生するが、この時期の被害は比較的小さい。その後、第1世代成虫が7月中～下旬に羽化して飼料イネ圃場内に集中

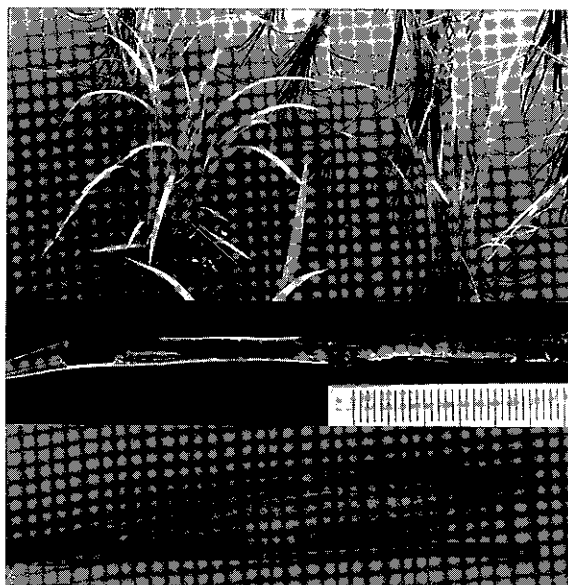


図-1 イネ幼苗に作られたツトとイネツトムシ幼虫
左上・左中：若齢幼虫，右上・右中：老齢幼虫，
下：繭に包まれた前蛹。

Control of Rice Skipper, *Parnara guttata*, Occurred on Whole
Crop Rice Fields. By Satomi NISHIMURA

(キーワード：飼料イネ，イネツトムシ，防除)